したるものありしが、しばしが程にて跡なくなりつ、又猫の蚤をとらんと呼びあるきて、妻子を養しものもありけるとぞ、これも遠き事にはあらず、猫の蚤を取らせんといふものあれば、まづその猫に湯をあみせ、濡たるまゝ毛をひかざる獸皮へ裹ておくに、猫の蚤悉その皮へうつるといへり、工夫はさることなれど、かくまでに猫を愛するもの多からねばや、これも長くは行れず、亦南京操といふ人形は、予○瀧澤馬琴が少かりしころまで、兩國橋のこなた廣巷路の勾欄にて玄たり、狂言は、一年中國姓爺の虎狩の段のみをして見せたりしが、いつの程にか絶て、その跡今は輕業をするなり、黃精賣、辛皮賣、麻賣など、予が幼稚かりし比までは、毎春に日としてその呼び聲を聞ざる事なかりしが、今はいと〳〵稀になりつ、夏日街頭に立て、氷一碗を一錢に賣ことは、いづれの比よりといふよしを詳にせねど、江戸の外にはかゝる事なし、實に海内の大都會也、仰べし、亦予がものこゝろ覺る比までもなくて、今盛に行るゝものおほかり、錦繪は、明和二年の頃、唐山の彩色摺にならひて、板木師金六といふもの、版摺某甲を相語、版木へ見當を付る事を工夫して、はじめて四五遍の彩色摺を製し出せしが程なく所々にて摺出す事になりぬと、金六みづからいへり、明和以前はみな、筆にて彩色したり、これを丹畫（タン）といひ、又紅畫（ベニエ）といへり、今に至ては江戸の錦繪その工を盡せる事、絶て比すべきものなし、さはれ近屬は、紅毛（フランダ）の銅版さへこゝにて出來、陸奥なる會津人すら、彼錦繪を摸してすなれば、世人既に眼熟て奇とせず、彼金六は文化元年七月身まかりぬ、當初彩色摺といふものはじめて行れし時、その美なること錦に似たりとて、世擧て錦繪の名をば負しけん、何ごとも品類多くなりては、賞翫すべきものも賞翫せず、只世に稀なるものを愛たしとするは、奇に誇らんとの爲なるべし、亦紙煙草入といふもの、予が幼稚かりし比までは、伊勢より出すものと、下野なる宇津宮より出すものを、人々賞翫したりしが、これも程なく細工人出來て、今江戸より出す紙煙草入は、世に敵手なきに至れり、亦看版書といふもの、商